

学位論文要旨

柔道のスポーツ化と「わざ」の変容
－「柔の理」の存在価値－

有 山 篤 利

目 次

序章 柔道のスポーツ化へのまなざし

- 第1節 研究の背景
- 第2節 問題意識
- 第3節 本研究の目的
- 第4節 本論文の構成

第1章 柔道のスポーツ化と「わざ」

- 第1節 スポーツ化研究の射程
- 第2節 スポーツ化論の基盤
- 第3節 武道の伝統に関する言説の問題
- 第4節 「わざ」と伝統価値

第2章 「わざ」の生成と「柔の理」

- 第1節 「柔の理」概念と伝統価値
- 第2節 「柔能く剛を制す」の起源
- 第3節 「柔の理」概念とその構造
- 第4節 講道館柔道における「柔の理」の継承

第3章 「柔の理」定着尺度の構成

- 第1節 測定用具の開発に向けた背景
- 第2節 研究の手続き
- 第3節 仮説的構成概念の検討
- 第4節 尺度開発に向けた調査
- 第5節 「柔の理」定着尺度の開発
- 第6節 本章の総括

第4章 柔道の「わざ」にみるスポーツ化の実態

- 第1節 尺度開発の過程で示された課題と今後の展開
- 第2節 研究の手続き
- 第3節 柔道実践者の「わざ」の実態に関する調査の実施
- 第4節 柔道実践者のセグメンテーション
- 第5節 競技化の進行と柔道実践者の「わざ」
- 第6節 本章の総括

終章 柔道のスポーツ化と「わざ」の変容

第1節 研究結果のまとめ

第2節 「わざ」の追求と生涯スポーツとしての柔道

第3節 「わざ」が導く武道教育

第4節 本研究の結論

第5節 研究の限界と今後の課題

引用・参考文献

序章 柔道のスポーツ化へのまなざし

第1節 研究の背景

20世紀後半から始まったIT（情報技術）革命は、その情報処理能力と伝達能力の加速度的な発展により、我々の社会に劇的な変化をもたらすようなグローバル化を推し進めている。しかし、グローバルに実体はなく、それは「ローカルに属する事物が集積された総体」に過ぎない。したがって、グローバルな世界を読み解くためには、ローカルな文脈のずれや重なり、対立や共通性などの比較が必須となる。ここに、柔道というローカルな身体運動文化に生じた変容（スポーツ化）を把握することへの教育学的な要請が認められる。

第2節 問題意識

これまでのスポーツ化論では、欧米の競技スポーツと柔道の伝統的価値観の対立が注目され、端的には柔道の徳育主義がスポーツの成果主義に浸食される過程のみが記述されてきた。そのため、価値観の変化に伴う動きの変容や、我が国の柔道実践者の動きについては全く関心が示されなかった。しかし、スポーツが文化的構成要素の複合体（佐伯，1984）である以上、価値観の変化に伴ってその運動を構成する動きも変容すると考えるのは妥当な推論であろう。

第3節 本研究の目的

本研究の目的は、柔道の「スポーツ化」と呼ばれる現象の実相を、我が国の柔道実践者の技や動きの変容として記述することにある。そこで本研究においては、①文化としての動きや技を「わざ」という言葉で捉えること、②日本人という集合名詞ではなく、実践者それぞれの実態をとおして「わざ」の変容を描くこと、③主観に依存することなく可能な限り客観的な実証に努めること等に配慮しながら研究を進める。

第4節 本論文の校正

以上の研究目的に対する結論を導くために、本論文は以下のような枠組みで構成されている。

- ・研究の仮説：柔道のスポーツ化の内実は柔道そのものの「わざ」の変容にある
- ・リサーチクエスチョン：
 - i. 「わざ」の変容は柔道の競技化と関わって進行しているのではないか
 - ii. 「わざ」の変容は我が国の柔道実践者のなかに進行しているのではないか
- ・論文の構成：
 - Q1 今なぜ柔道のスポーツ化が問われねばならないか…序章
 - Q2 柔道のスポーツ化を把握するのに、なぜ「わざ」の変容をみるのか…第1章

- Q 3 柔道の「わざ」はどのような伝統価値によって生成されるのか…第 2 章
- Q 4 柔道の「わざ」の変容をどのようにして測定するのか…第 3 章
- Q 5 「わざ」の変容は現代柔道の実態にどのように現れているのか…第 4 章
- Q 6 得られた知見は今後の柔道にどのように生かされるのか…終章

第 1 章 柔道のスポーツ化と「わざ」

第 1 節 スポーツ化研究の射程

寒川 (1995) は、ローカルな身体運動文化が近代スポーツに生まれ変わる時、民族に閉じられたコードは通文化的なコードへと転換を余儀なくされると述べているが、それは同時に、ローカルな身体運動文化が自らのエスニシティを掘り下げ内面化する機会でもある (スチュアート・ホール, 1999)。本研究は、柔道のスポーツ化を文化帝国主義的な対立構造として捉えることを射程とするものではない。スポーツ化の実相を柔道の「わざ」の変容として検討することにより、ローカルの立場から現代スポーツに対して意味ある発話を提供することを射程におくものである。

第 2 節 スポーツ化論の基盤

稲垣ほか (2009) が指摘するように、現代のスポーツの基本的性格はスポーツ愛好者をスポーツ消費者へと誘導する特質に由来する。本論ではこの特質を「消費価値」と名付けるが、柔道のスポーツ化論は、この現代スポーツの「消費価値」とエスニックスポーツに内在する「伝統価値」との対峙として描かれ、近代に萌芽した「消費価値」と古来の「伝統価値」の葛藤は JUDO 対柔道の対峙として現代も再生産され続けている。

第 3 節 武道の伝統価値に関する言説の問題

「伝統価値」とは、民族や国家という固有の色を付与された事物の質的総体であり、それには他者との識別性や固有性が要求される。これまでのスポーツ化論において「伝統価値」に比定されてきたものは、黙示的なルールの存在 (田中, 2005)、武士道精神の称揚 (日本武道館, 2007)、徳育主義と礼法の重視 (文部科学省, 2018) などがあるが、これらの主張はいずれも、創られた伝統 (ホブズボウムほか, 1992) であつたり、オリジナリティという点で問題があつたりするなど、エスニックスポーツの「伝統価値」に比定するには課題があつた。

第 4 節 「わざ」と伝統価値

寒川 (2014) は、武道の特徴は道を極めることを心の修行に結びつけることにあり、それは技術の追求をとおして達成されると述べている。武道ではこれを「事 (= 技) 理 (= 真理) 一体」という言葉で表現する。このように心の問題に有機的につながった技が、本研究で問

う「わざ」である。「わざ」の問題を語ることなしに心の問題に言及することはできないとする構えのなかに、武技・武芸から武道が受け継いだ伝統があり、それは、「わざ」のなかに「伝統価値」が凝縮されていることを意味している。ゆえに、柔道のスポーツ化へのまなざしは、「わざ」を射程にすることによって新たな地平を獲得する。

第2章 柔道のスポーツ化と「わざ」

第1節 「柔の理」概念と伝統価値

武道の「わざ」の極意をあらわす原理は、一般的に（技の）理合いという言葉で表現される。したがって、「わざ」の問題を扱うためには、まず理想の「わざ」を生み出す理合いについて言及せねばならない。古来、我が国の徒手武術は、柔術や柔（やわら）などその冠に「柔」という語を用いてきた。これはその技能体系が「柔の理」という理合いによって組み上げられていることを意味している。「柔の理」は、武道の「わざ」を特徴づける「事理一体」の「理」に相当し、柔道の「伝統価値」を担保する概念でもある（嘉納，1911）。

第2節 「柔よく剛を制す」の起源

「柔」という語の用例は中国古典の易経や老子にみられ（藤堂，1981）、「柔能く剛を制す」という語は同じく三略に求められる（守屋訳，1999）。それぞれの書によって解釈は微妙に異なるが、いずれにおいても「柔」にはしなやかさや従順性が含意されている（寒川，2014，pp.307-321）。しかし、中国の「柔」はあくまでも天地の調和を導くための治天の真理であった。一方、このしなやかさや従順性を自身の格闘術の基礎に位置づけたのが、我が国の柔術であった。中国で生まれた治天の真理としての「柔」は、我が国の柔術の「わざ」の極意である「柔の理」へと再編されたのである。

第3節 「柔の理」概念とその構造

中国で生まれた「柔」は、「敵の力の利用」など日本独自の解釈も加えながら、柔術の「わざ」の極意をあらわす理合いとなった。この柔術の「わざ」の生成機序を、佐藤（1991）が提示したスポーツ概念を援用して整理するならば図1のようになる。

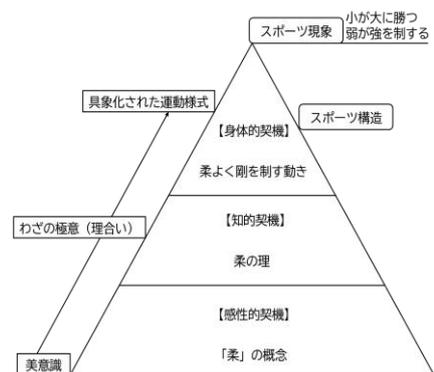


図1 柔術の「わざ」の発生機序

第4節 講道館柔道における「柔の理」の継承

嘉納治五郎は、「柔の理」を発展させる意味で「精力善用」という言葉を創案するが、それは、古来の「柔の理」の近代的解釈であった（藪根ほか，1999）。さらに嘉納は、古来の「事理一体」の考え方に沿って、「柔の理」を競技の場だけではなく社会生活で活用すると

いう主張を展開する。これが「自他共栄」である。嘉納は、闘争の技を前近代的な合戦ではなく近代スポーツを取り入れることによって担保しつつ、同時に人格陶冶の「道」を教育に位置付けることによって矛盾なく併存させたのである（図2）。

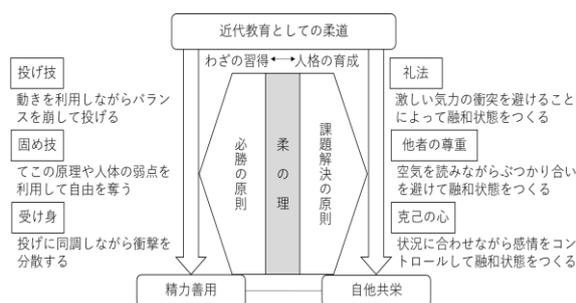


図2 柔道の学びの構造

第3章 「柔の理定着尺度」の開発

第1節 測定用具の開発に向けた背景

従来のスポーツ化論においては、誤った海外 JUDO に対する真正な日本柔道という教条主義的な論が固定化され、「わざ」を文化ヘゲモニーの動態として検討する視点は見られなかった。そのため、「柔の理」や「柔能く剛を制す」動きは主観的なイメージとして現代柔道の中に今も不変のものと見なされ、その実際の動きにスポーツ化の生々しい現実を見出そうとする試みは行われてこなかった。このような従来のスポーツ化研究の課題を引き取るために、本研究では、我が国の柔道「わざ」の変化について客観的尺度を用いて明らかにすることとした。

第2節 研究の手続き

開発しようとする尺度は、個人の動きや技などの選択傾向を「柔の理」の重視度を測ることによって推測するものとなる。はじめに仮説的構成概念の開発を試みるため、共同研究者らとともに概念を操作化する原案を作成し、デルファイ法によって内容的妥当性を担保した。その後、尺度構成に向けた調査を実施し、得られた回答について因子構造を検討したうえで、因子分析モデルの適合度を検証するとともに信頼性の検討を行った。また、調査対象の各群の傾向について、尺度得点の平均値の比較を行うことにより尺度の構成概念妥当性を検討した。

第3節 仮説的構成概念の検討

共同研究者4名とのトライアングレーションを経てSD法を用いた質問項目の原案を作成した後、尺度構成に必要な専門性を有する研究協力者7名を選定し、デルファイ法を援用して内容的妥当性を検討した。作業にあたっては、研究協力者の専門性を生かし、①「柔」及び「剛」の動きの的確さ、②統計的処理を行う上での適切さ、③国語表現の的確さという3つの観点で質問項目の可否を検討した。研究協力者との間で意見が一致するまで項目の取捨選択や文言修正を繰り返した結果、3つの仮説的構成概念と28のインディケータからなる質問紙が完成した。

第4節 尺度開発に向けた調査

平成26年8月～12月の間に、表1の対象者について調査を実施した。調査内容は、①フェイスシート（年齢・性別・体重・スポーツ競技経験・競技レベル・競技の継続年数・古流武術の経験）、②柔の理定着尺度28項目によって構成されている。また、②については4段階リッカート尺度により回答を求めた。

表1 調査対象

	有効回答数 /全回答数	平均年齢(歳) ±SD	年齢幅 (歳)
柔術修行者	99/122	49.9±16.2	14-83
柔道競技者	246/264	21.0±6.6	15-63
レスリング競技者	66/69	18.2±2.2	10-22
一般人	253/257	21.1±6.4	18-70

第5節 「柔の理定着尺度」の開発

得られたデータについて探索的因子分析を適用した結果、因子数2において因子負荷量.40以上の単純構造を示した(表2)。第1因子は、主として従順な動きやテクニックに関する11項目で構成され、「氣息を外す動き」と命名された。第2因子は、主として臨機応変な状況判断に関する9項目で構成され、「陰陽の使い分け」と命名された。この2因子構造は、寒川(2014, pp307-321)が指摘する古流柔術における「柔の理」の特徴と合致するものであった。

その後、当該モデルの適合度を構造方程式モデリングにより検証した。適合度指標には GFI, AGFI, CFI,

表2 柔の理の定着度を評価する因子パターン行列 (n=345)

因子名	番号	インディケータ	因子負荷量	M	SD	Cronbachのα係数
氣息を外す動き	28	守りから攻めへの変化	.74	2.78	1.10	.89
	13	動きの誘導	.74	2.89	1.00	
	25	相手の防御への対応	.73	2.80	1.07	
	7	相手の技への対応	.72	2.95	1.03	
	4	強い力への対応	.70	2.96	1.03	
	18	技の防御	.68	2.82	1.03	
	6	構え(姿勢)	.66	3.08	1.08	
	10	守勢のときの対応	.63	2.81	1.03	
	20	重視する動き方	.62	2.77	1.08	
	8	技の選択肢	.56	2.71	1.10	
	17	先手の取り方	.52	2.57	1.08	
陰陽の使い分け	15	闘志の表出	.74	2.69	1.16	.82
	14	激しい動きへの対処	.64	2.98	.99	
	19	セルフコントロール	.62	2.41	1.19	
	23	攻めへの対処	.61	2.80	1.07	
	27	視線の衝突	.60	2.89	1.17	
	2	闘志への対処	.59	2.72	1.14	
	26	戦術の変更	.54	2.72	1.08	
5	素早い動きへの対処	.53	2.76	1.08		
22	戦術の組み立て	.45	2.80	1.09		

RMSEA を使用した。得られた数値はそれぞれ採択基準を満たしており、当該因子分析モデルはおおむねデータに適合していることが明らかとなった。内的一貫性についても両因子とも基準を満たしていた。また、尺度の妥当性を検証するために、①柔道選手(競技化され論理上「柔の理」を継承)②柔術修行者(競技化されずに「柔の理」を継承)、③レスリング選手(海外の格闘技)、④一般人(競技として柔道を未経験)の4群の平均点を比較した。両因子ともに平均点は②柔術修行者が他のすべての群に対して有意に高く、④一般人は①柔道選手に対して有意に高いという結果となった(表3)。古来の武技・武芸を継承している②柔術修行者は、他の群よりも「柔能く剛を制す」動きを重視する傾向があり、「柔の理」が現在も確かに継承されている様子が看取できる。これにより、本尺度の構成概念の妥当性が確認できた。

表3 調査対象ごとの「柔の理」の定着度の比較

	①柔道競技者 n=256		②柔術修行者 n=101		③レスリング競技者 n=66		④一般人 n=253		F値 (3, 672)	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
氣息を外す動き	2.64	.71	3.27	.58	2.70	.52	2.86	.61	29.94**	②>①, ③, ④ ④>①
陰陽の使い分け	2.57	.65	3.22	.68	2.62	.49	2.79	.54	29.40**	②>①, ③, ④ ④>①

**P<.01

第6節 本章の総括

「わざ」の理合いとしての「柔の理」を把握するための測定尺度の開発を試みた。その結果、「氣息を外す動き」と「陰陽の使い分け」の2因子、20項目からなる「柔の理定着尺度」が開発された。これは、「柔の理」の定着状況が「柔能く剛を制す」動きとして定量的に把握でき、それは「氣息を外す動き」という従順な動きやテクニックの側面と、「陰陽の使い分け」という戦術選択の側面から構成されることを示唆するものである。しかし、一方で現代の柔道競技者は相対的に「柔能く剛を制す」動きを重視していない傾向にあり、柔道は動きにおいてスポーツ化している可能性が示された。

第4章 柔道の「わざ」にみるスポーツ化の実態

第1節 尺度の開発の過示された課題と今後の展開

尺度開発の過程で、現在の柔道競技者が「柔の理」を重視していない可能性が示された。柔道競技者の「柔の理」の重視度は柔道経験のない一般人よりも低く、レスリング競技者と同等であった。この結果は、競技スポーツが「わざ」の変容に関連する可能性を示している。しかし、今回の調査対象になった柔道競技者の大半が高校・大学のアスリートであり、サンプルの偏りが影響している可能性があるため、柔道実践者を対象にしたより詳細な継続調査が必要となった。

第2節 研究の手続き

柔道の競技化と「わざ」の変容との関連性についてより詳細な検討を行うため、「柔の理定着尺度」を用いた調査を行った。調査対象については多様な柔道実践者の確保に配慮した。得られたデータについては、はじめにクラスター分析を用いて柔道実践者のセグメンテーションを行い、それぞれ群の特徴を記述した。その後、「柔の理」の認識状況についてクラスター分けされた各群と実践者の属性の連関について、 χ^2 検定により構成人数の違いを検討した。また、各群に対し、年齢・修業年数・段位・柔道の稽古目的のそれぞれを従属変数にした平均値の比較を行った。

第3節 柔道実践者の「わざ」の実態に関する調査の実施

調査内容は、①フェイスシート（属性、年齢、性別、修行年数、段位、稽古の目的）、②柔の理定着尺度によって構成されている。②についてはSD法を用いて柔と剛（非柔）を対置させ、4段階リッカート尺度による回答を求めた。調査時期及び対象については、表4の通りである。

表4 調査対象・時期・方法

	人数	平均年齢(歳) ±SD	年齢幅	調査時期	調査方法
講道館	119	51.4±17.4	18-84	2016.6.9-6.11	面接
大学生	94	19.8±1.3	18-24	2016.6.1-10.31	郵送・集合
合計	213	37.3±20.3	18-84		

第4節 柔道実践者のセグメンテーション

クラスター分析を用いて、「氣息を外す動き」及び「陰陽の使い分け」の因子得点をもとに、調査対象となった実践者の分類を試みた。その後、各群の特徴を把握するために、それぞれの因子得点を従属変数とした平均値の比較を行った。その結果、柔道実践者は氣息傾向群・柔の理軽視群・柔の理重視群の3群に分かれることが明らかとなった。これは、柔道には競技に対し消極的・消極的適応・積極的の3つの姿勢があるという永木（2008）の指摘に合致する結果となった。

第5節 競技化の進行と柔道実践者の「わざ」

はじめに、クラスター分けされた3群について、競技者、指導者、愛好者の3つの属性との連関を検討した結果、柔の理軽視群ほど競技者が有意に多いのに対して、柔の理重視群は愛好者が有意に多いことが明らかとなった（表5）。

また、年齢については、柔の理軽視群に対して、氣息傾向群及び柔の理重視群が有意に高くなった。修行年数及び段位については、各群との間に主効果は見られなかった（表6）。

稽古目的については、「勝つため」という稽古目的において柔の理軽視群は柔の理重視群よりも有意に高く、「究（極）めるため」という稽古目的においては逆に柔の理重視群が柔の理軽視群に対し有意に高いという結果となった（表7）。

表5 χ^2 検定によるクラスターごとの属性の比較

属性	氣息傾向群 (79)	柔の理軽視群 (78)	柔の理重視群 (49)	χ^2
競技者(99)	39 (49.4)	47 (60.3)	13 (26.5)	16.71** d.f. = 4
指導者(31)	8 (10.1)	10 (12.8)	13 (26.5)	
愛好者(76)	32 (40.5)	21 (26.9)	23 (46.9)	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
()内は%

表6 一元配置分散分析によるクラスターごとの年齢・修行年数・段位の比較

	①氣息傾向群 (n=82)	②柔の理軽視群 (n=79)	③柔の理重視群 (n=50)	有意差
年齢 (SD) (Min.-Max.)	39.29 (21.87) (18-80)	30.61 (17.18) (18-78)	44.40 (19.47) (18-84)	F(2, 208)=8.26** ①>②* ③>②***
修行年数 (SD) (Min.-Max.)	23.05 (1.98) (1-66)	17.46 (1.68) (1-60)	23.66 (2.63) (1-70)	F(2, 210)=2.90 n.s.
段位 (SD) (Min.-Max.)	3.00 (2.08) (0-8)	2.48 (1.73) (0-7)	3.28 (2.21) (0-8)	F(2, 210)=2.75 n.s.

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表7 一元配置分散分析によるクラスターごとの稽古目的の比較

	①氣息傾向群 (84)	②柔の理軽視群 (79)	③柔の理重視群 (50)	有意差
勝つため (SD) (Min.- Max.)	38.67 (35.91) (0-100)	47.11 (34.99) (0-100)	38.80 (27.62) (0-100)	F(2, 210)=6.03** ②>③**
指導力向上のため (SD) (Min.- Max.)	11.49 (1.63) (0-70)	12.14 (2.03) (0-80)	14.70 (2.32) (0-60)	F(2, 210)=.62 n.s.
楽しむため (SD) (Min.- Max.)	28.93 (26.99) (0-100)	24.54 (25.29) (0-100)	32.40 (26.65) (0-100)	F(2, 210)=1.43 n.s.
究(極)めるため (SD) (Min.- Max.)	20.92 (20.06) (0-70)	16.02 (13.50) (0-50)	27.00 (23.19) (0-100)	F(2, 210)=5.09** ②<③**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

第6節 本章の総括

- ① 現代の柔道実践者は、氣息傾向群（伝統を意識しつつ競技スポーツとして実践）、柔の理軽視群（競技スポーツとして実践）、柔の理重視群（柔術的に実践）の3群に分かれている。
- ② 柔の理軽視群には競技として実践している者が多く、柔の理重視群には愛好者として実践している者が多い傾向にある。指導者については両群が二極化し混在している。
- ③ 年齢が高くなると柔の理重視群が多くなる傾向にある。
- ④ 修業年数の長さや段位の高低は「柔の理」への認識度と関連がない。
- ⑤ 「勝つため」に稽古する者には柔の理軽視群が多く、「究（極）めるため」に稽古する者には柔の理重視群が多い傾向にある。

終章 柔道のスポーツ化と「わざ」の変容

第1節 研究結果のまとめ

これまでの調査研究を通じ、「柔道のスポーツ化の内実は柔道そのものの「わざ」の変容にある」という仮説が裏付けられた。柔道は「わざ」においてスポーツ化しつつあるが、一方で、競技スポーツの文脈から離れ、理合いに沿った「わざ」を探求するような武道的な接し方を再構築することができれば「柔」道を実現できる可能性も示された。

第2節 「わざ」の追求と生涯スポーツとしての柔道

スケートボードなど現代流行のスポーツには、技の追求という内省的な活動プロセスへの欲求が基盤にある。柔道を現代にふさわしい生涯スポーツとして実践するには、本研究の知見が示すように競技志向から「わざ」志向への自然な移行が必要となる。古来の武術的な接し方にこそ、現代柔道の生き残りをかけた戦略の要諦があり、ここに、「柔の理」という理合いにもとづいた「わざ」へのまなざしを取り戻す意義が認められるのである。

第3節 「わざ」が導く柔道教育

柔道の「わざ」に注目することで、伝統文化の学習は体育の中核である運動学習と一体化可能となる。本研究における調査結果は、それが論理上の推論ではなく実際の指導として実現可能なレベルにあることを示している。「柔の理」によって生成される柔道の「わざ」は、「柔能く剛を制す」動きとして実体化でき、その認識状況は「柔の理定着尺度」によって測定可能である。

第4節 本研究の結論

①柔道のスポーツ化は競技化に伴う「わざ」そのものの変容にあり、②柔道のスポーツ化は我が国の柔道実践者における「わざ」の変容として記述できた。以上の結果より、柔道の「スポーツ化」と呼ばれる現象の実相を、我が国の柔道実践者の技や動きの変容として記述するという本研究の目的は達成できたものとする。

第5節 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、変容という現象を捉えるためにはその前後の姿を捉える必要があるにもかかわらず、今回は柔道の技の原型を古流柔術の技に投影することによって代替したことがあげられる。また、開発された尺度は実践者の自身の「柔の理」の重視度をもってその定着状況を推定するものであり、実際に動作として「柔能く剛を制す」動きを実現できているかは確定できない。今後の展開として、剣道など他の武道も含めた「わざ」研究を展開する必要がある。

引用・参考文献

- ・佐伯聡夫(1984) スポーツの文化. 菅原禮編著. スポーツ社会学の基礎理論, 不味堂出版, pp.67-98.
- ・寒川恒夫(1995) 第5章遊び. 山口修・齋藤和枝編. 比較文化論-異文化の理解-. 世界思想社, pp.103-128.
- ・スチュアート・ホール(1999) ローカルなもの-グローバルなもの-グローバル化とエスニシティ. A.D.キング編: 山中弘・安藤充・保呂篤彦訳. 文化とグローバル化. 玉川大学出版部, pp.41-66.
- ・日本武道館(2007) 日本の武道. ベースボールマガジン社, pp.8-9.
- ・文部科学省(2018) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房, pp.143-147.
- ・エリック・ホブズボウム, テレンス・レンジャー: 前川啓治, 梶原影昭ほか訳: 1992) 創られた伝統(文化人類学叢書). 紀伊國屋書店, pp.9-28.
- ・寒川恒夫(2014) 日本武道と東洋思想. 平凡社, pp.54-143.
- ・嘉納治五郎(1911) 師範および中学教育と柔道. 中等教育 10号. 嘉納治五郎体系第5巻, p.139.

- ・藤堂良明（1981）講道館柔道の思想的背景について-柔術から柔道へ-. 武道学研究, 14 (1) : pp.36-43.
- ・守屋洋（1999）六韜・三略. プレジデント社, pp244-245.
- ・佐藤臣彦（1991）体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察. 体育原理研究 22 : 1-12.
- ・藪根敏和・岡田修一・山崎俊輔・永木耕介・猪熊真（1999）「柔の理」の意味に関する研究. 武道学研究, 31 (3) : pp.14-25.
- ・永木耕介（2008）嘉納柔道思想の継承と変容. 風間書房, p.110.